

「たったひとつの宝もの」

世田谷区立桜町小学校 岩田郷子



1. プロジェクト概要

Gazi Bay, Kwale District, Kenya

ケニア、クワレ県 ——

マングローブ林は、地球上で最高レベルの生産性を持つ湿地生態系である。こうした熱帯の沿岸林は、生物にとって非常に重要な生息地であり、珊瑚礁を土砂の堆積から守り、沿岸が侵食されるのを防ぐ大事な役割を果たしている。

かつてマングローブ林は、熱帯と亜熱帯の全海岸線の4分の3を占めていた。しかし現在、それらの森は半分以下になり、残った森も毎年2%以上が、薪炭材、建築資材、沿岸地域の土地開発、エビの養殖などのために消滅していると推測されている。つまり現在、最も危機的状況にある生物生息地にも数えられているのである。

ケニア南部の海岸地帯にあるガジ村の人々は、マーク・ハクスハム博士、ケニア海洋漁業研究所のジェイムズ・カイロ博士、リスボン大学のマルチン・スコフ博士の指導を受け、植林によって再生されたマングローブ林の生態系力学を調査している。

2. 内容

私たちボランティアは、ガジ湾の減少したマングローブ林の再生を目指す植林実験に協力し、村人たちと一緒に暮らし、働く。海辺にある2か所の実験場でマングローブの苗木を植えるだけでなく、これらの植林地が沿岸侵食率に与える影響、またマングローブ林を頼る動物、とくにカニ類と魚類に与える影響の観察も手伝う。

この結果は、マングローブ林に木材と魚類を依存する地元漁村の生活の支えとなる。また、マングローブ林を二酸化炭素の吸収源として利用するためのデータを提供する。このことによって、減り続けるマングローブ林を再生し、海面上昇の影響と戦う、地球規模の努力に小さい力ではあるが、協力することにもなる。

3. 行程 (8/7~17 11日間)

8/7 集合(モンバサ市内のホテルロビー)

8/8 マングローブマラソン

8/9~12 活動

AM: Kinondolにて生態系調査

PM: ラボで実験・データ入力 など

18:00~ マングローブについての講義

20:00~ 村の歓迎会・ボランティアトークなど

8/13 OFF (Ksite国立海洋公園へ)

8/14~16 活動

AM: Kinondo、ビーチにて植林

PM: ラボで実験・データ入力 など

16:00~ 村人との交流 など

20:00~ ボランティアトーク・散歩など

8/17 解散(モンバサ市内のホテルロビー)

ここから、実際の活動について詳しく見ていきたい。

(1) 集合

現地の街の特定の場所での集合。航空券片手に飛行機を乗り継ぎ、そこにたどり着くまでが、私にとっては、とても緊張するできごとだった。当初は、定刻に着く予定だったが、飛行機遅延のため、まさかの遅刻。出発前に遅延がわかっていたので、本部に連絡をとっておいた。当日は、ナイロビの機内から電話。単語をつないだだけの英語にもかかわらず、電話の向こうからはやさしい声。モンバサの空港で現地スタッフと対面。その足で、ホテルへ。

着くと、カナダ・イギリス・オランダ・ロシア・オーストラリア・アメリカ・日本からのボランティアたちが笑顔で話をしていた。メンバーは、企業から派遣されたボランティア、私たち日本の教員、何十とあるアースウォッチの研究の中からこのプロジェクトを選んでやってきた者と、みんな“自分の人生の中のこの貴重な体験”を思い切り楽しもうという意欲に満ち溢れていた。まぶしかった。

しかし、私の心の中は、この英語が話せない不安、遅刻して迷惑をかけた申し訳なさ、初対面の緊張、本当に役に立てるのだろうかという漠然とした心配・・・村へ向かう車の中で、自分を落ち着かせようと必死だった。「大丈夫。」自分に言い聞かせた。長い11日間が始まった。そんなスタートだった。

その夜、早速、「期待と不安」を一人ひとりが発表。みんな早口の英語で話し始める。(といっても、それが普通の速さなのだろうが。)単語しか拾えない。どうしよう……。自分の番。片言の英語で話し始めた。通じているだろうか……。私は、自分が英語を駆使できないこと、そしてそのことで、みんなが気を遣ってしまうのではないかということが、一番の不安だった。

しかし、みんなの笑顔、わからないことがあったら何でも聞いてという姿勢、私の質問に答えてくれるゆっくりとした口調、そしてたびたび「Satoko, all right? 」と声をかけてくれるやさしさに囲まれるうち、「言葉は問題ではない」と思えるようになってきた。

ここでであった仲間に初日から感謝の気持ちでいっぱいになった。マングローブの調査活動以前に、こんなところで、世界の人々との出会いが、もうすでに一つの“宝”となり始めていた。“支えられて生きている”それを実感したことが、素直にうれしかった。

「大丈夫。」多くの人に、同じように一歩を踏み出してもらいたい。そんな思いをこめて、集合について詳しく書いた。副校長から渡された一枚のパンフレットを見て、自分の意思で申し込んだはずだった。だが、英文書類の作成、航空券手配、予防接種、ブリーフィング(英語)の読み込みなど、出発が近づくにつれ、緊張感と本当に私でいいのか? という疑問に押しつぶされていた。

そんな中でのスタートだったので、この11日間が“長い”ものから“短い”ものに変わり始めたこの初日が、私にとってはとても大きいのだ。

(2) マングローブマラソン

いよいよ、実際のマングローブとのご対面。くるぶしまであるマリンブーツを履いて、足のような根の上、ぬかるみの中を数時間歩いた。ひざ近くまで泥に浸かり、まさに冒険。わくわくする時間だった。



(ころばないように、枝を伝って・・・あちこちから声が「うっ」)

(3) Kinondoにて生態系調査

となり村のKinondoでの作業は、潮が満ちてくるまでの時間、めいっぱい行った。既に植林された区画で、木がどのくらい生長したか、またカニや貝がどのくらいいるのかを調べた。

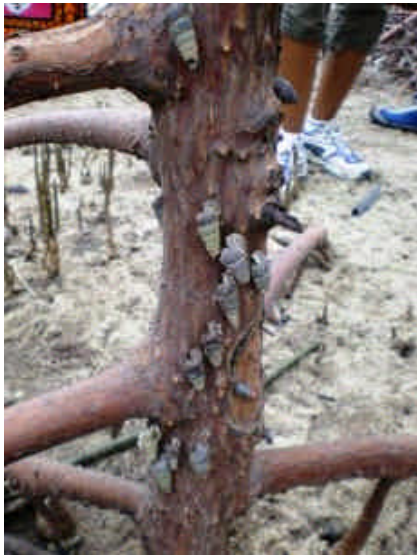
マングローブといっても、それは総称であって、

種類はいくつもある。1種類だけ植えた区画、2種類植えた区画、3種類植えた区画と、どのような違いが出てくるのかのデータ収集である。生長は、背丈、枝廻りの測定、葉の枚数のカウント、ランダムに選んだ葉の縦横の長さの計測などをもとにした調査となった。



（葉の身長を計測中。たまに、虫に喰われている葉も・・・）

また、カニの生態は巣穴の数、貝は潮が満ちたときに張り付いたと思われる枝についた巻貝の数で調べた。



（大きさも様々。サイズも重要なデータになります。）

他にも、土の中の温度や酸素の量を調べるポランテアもいた。

いろいろな作業に携われるように、仕事分担も研究者たちが割り振ってくれた。自分の作業が終わると、仲間のもとへ。自然とチームとしての意識が高まっていた。



（こんな筒で、土を取り出します。さて、何を測定中？）



（麻ひも、木の枝・・・自然のものが調査では大活躍！）

★ココナッツタイム

午前の活動は、14:00ごろまで。長い作業時間の途中で、休憩時間が入る。それが、“ココナッツタイム”。生のココナッツをその場で割って、ジュースと甘い実で疲れを癒す。日本では苦手だったのに、あら不思議。本物は味が違う！



（スプーンも、硬い皮で作ったお手製のもの。土に還る！）

(4)ラボでの実験・データ入力

毎日、15:00ごろには、ラボに集合。その日の調査結果をパソコンに入力したり、今まで採取した葉や土をもとに、実験をしたりした。



(読む係、打つ係。息を合わせてスピードUP)

採ってきた土は、採取した深さによって分類されている。どの層まで根が届いているか。小さな根も全て拾い出した。



(根を見ると、木がしっかり命を育んでいたことを実感)



(たまには、ラボの外で。子どもたちが集まってきます！)

また、葉をオープンで乾燥させて、養分を調べる準備も手伝った。ボランティアトークで、日本の折り紙を紹介して、器用だと思われたのか、日本人2人はこの担当を任された。



(1種類につき5枚の葉。アルミホイルを破かないように...)

(5)マングローブについての講義

もちろんであるが、全て英語で書かれた資料が手渡される。それをもとにして、黒板も使った講義。内容は、「生物多様性」「炭素循環」「気候変動」など。正直言って、専門用語が飛び交う中、理解するのは一苦労だったが、聞き取れた単語を電子辞書で訳したり、イラストを頼りにしたりして、この時間を過ごしていた。

このとき、学校での自分の授業を思い出していた。やはり、視覚でうたえられるとわかりやすい。わかると楽しい。クラスに40人もいれば、理解が難しい子がいて当然だ。授業の基本に立ち返ることができた。



(人を木に見立てて、生き物のイラストを貼り付けて...)

(6) Kinondo、ビーチにて植林

土のKinondoと、砂のビーチの2カ所で植林を行った。苗を運ぶための道具も、その場にある物で。6㎡の区画に、均等に植える。目印のための枝を集めるところからの作業となった。日本のような湿気はないが、照りつける太陽の日差しは厳しい。苗を運ぶ者、穴を掘る者、植える者。無言の中で、自然と分担ができていった。プロジェクト後半の作業。ここまで一緒に生活した絆から生まれたものか。

砂浜は、苗が波にさらわれるかもしれないので、穴を深く掘って植えた。土や砂の感触がとても気持ちよかった。



(枝で目印をつけて…。さて、ここに植えるのは何種類？)



(近くに住む子どもたちも一緒に作業。苗とともに成長だね。)



(海岸での植林。午後には、海水に浸かる。でも力強い苗！)



(大事に育てられた苗。運搬道具も手作り。それが基本。)

(7) 村の歓迎会・ボランティアトークなど

今回のプロジェクトでは、実際の調査だけでなく、村との交流・メンバーとの交流の時間が多く設けられていた。“環境教育”は、「今の自分の生活が当たり前ではないと知ること」も含まれる。地球のどこかで、自分たちとは違う循環の中で生活しているだけがいる。そのことを意識できるかどうか・・・地球市民として生きる第一歩を踏み出すカギをにぎっていると私は、考えている。その意味において、このような時間は、“環境教育”を考えるための貴重な機会となった。

①村の歓迎会

2日目の夜、火を囲み、太鼓のリズムに合わせてアフリカンダンスが始まった。私は、浴衣を着て参加。エネルギーッシュな歓迎に圧倒された。



(老若男女、みんな大集合。何時間踊っていただろうか？)

②ビレッジランチ

村の古いイスラム教会の中でのランチ。村の代表者もいらしてくださいました。村全体で、私たちを迎えてくれていることに、本当に頭が下がる思いでいっぱいになった。



(イモ・野菜の唐揚げ、ココナッツケーキ。伝統料理を満喫。)

③ビレッジディナー

ボランティア8人が、3軒の家庭に分かれ、民家での夕食をとった。ランプの灯り一つの中で、伝統料理をいただいた。このときに、初めて魚を食べた気がする。ご飯はココナッツライス。最初に、ピッチャーに汲まれた水で手を洗う。そして、右手を使って食す。これが、意外と難しい…。神聖な空気が流れていた。私たちを受け入れてくれたご家庭のみなさんに感謝。



(気持ちも洗われていく。ゆったりとした時間が流れていく。)

④フットボールマッチ

村の若者とアースウォッチチームで、サッカー対決。サッカーといっても、立派なゴールがあるわけではない。マングローブの木でできたポールにつるをつなげたロープ1本。それとボール。フィールドはでこぼこ。日本のような設備がなくても、みんな大い

に楽しんだ。

スポーツでともに汗をかくことは、言葉を超えた国際交流。以前、長野オリンピックやサッカーワールドカップでボランティアをしたときのなんともいえない一体感を思い出した。

結果は1-9で大敗。機械に頼らない生活で培われたのか、村人の強い体には勝てなかった。



(さて、ゴールはどこにあるでしょうか??? よく見て!)



(ボールを追いかける気持ちは万国共通。心が一つに。)

⑤小学校訪問

モンバサは、赤道直下の村。このときは、ちょうど冬休み。ケニアの小学校は、1~8年生まで。セカンドスクールに進めるのは、この中の30%。子どもたちは、やはり働き手として期待されているのだろうか。私たちが訪問した日、7、8年生は登校していた。日本では中学1、2年生にあたる子どもたち。ボランティアが自国紹介をし、最後に子どもたちの将来の夢を聞いた。どの子も、パイロット、医者、看護師など、将来への希望に満ちあふれていた。この願いが叶うといいのだが…。私には何ができるのだろうか? もどかしい気持ちでいっぱいになった。



(浴衣で、けん玉にチャレンジ。「もしもしカメよ♪」)



(歓迎の歌。勉強したい気持ちでいっぱい教室だった。)

⑥ボランティアトーク

夕食のあとは、一日に1～2人ずつの自国紹介の時間。自分の国の良さが伝わるように、小道具を持ち寄ってのトーク。写真あり、リコーダーあり、チーズあり・・・とさまざま。どの国も行ってみたい！と思わせてくれるものだった。ここでも、英語が分からなくても大きな問題はなかった。五感が言葉の壁を破ってくれた。

ちなみに、私が持って行った日本グッズは、浴衣・折り紙・けん玉・紙風船・歌舞伎の写真・学校の写真・風鈴、そして“柿の種”“あんこ玉”。折り紙は、見せるだけではなく、マングローブ林にカニがたくさんいたので、一緒にカニを折ってみた。また、近くにビールがあったせいか?“柿の種”は大好評で、あっという間に売り切れた。もう一人の日本人参加者、牧先生の紹介は、じゃんけんゲームに漢字講座。視覚・味覚・体験で攻めた日本チーム。興味をもってもらえていたらうれしい。



(オランダの紹介。チーズにマスタードをつけて。美味！)



(日本の風鈴。軒先につるしたまま、帰国しました。)



(ミニ折り紙講座。やはり日本人は器用なのか?)

(8)OFF (Ksite国立海洋公園へ)

7日目は、休日。全員で、海洋国立公園へ。岸から、小舟に乗り1時間。お目当てのシュノーケリングスポットに到着。途中、イルカの群れにも遭遇。水色でも緑でもない海の色。珊瑚と小さい魚とともに過ごした休日だった。



(ケニアの海。想像を超えた色。ずっとこのままで・・・。)

(9) ボランティア仲間との時間

11日間、寝食をともにした仲間。用意されたプログラム以外にも、交流の機会は盛りだくさんだった。ラボの作業が早く終わり、歩いて10分のビーチに泳ぎに行ったり、ケニアのバーに行ったり。最終日の夜は、懐中電灯片手に浜辺まで行き、小さな焚き火をたよりに夜中まで語ったり・・・。

「帰りたくない。」そう思ったのは、ケニアの自然や時間の流れだけでなく、この仲間との時間が私の中で、“たったひとつの宝もの”になったからだろう。



(上を見ると、満点の星空。耳には波の音。心には思い出。)

4. 村での生活

私たちは、この11日間、とても恵まれた環境の中で生活することができた。8人は、2つの宿舎に分かれて、1人もしくは2人部屋で過ごした。ベッドには蚊帳が付き、シーツも、私たちが作業に出かけている間に取り替えられていた。

食事も、地元のおいしい料理を毎日食べた。特に準備当番などはなかったが、気がついた人が配膳・片付けを手伝う形ですすんでいった。

トイレも、この村では珍しいのではないだろうか、

水洗で清潔だった。シャワーも、水ではあるが、毎日浴びることができ、汗を流すことができた。

このような待遇で迎えてもらった分を、しっかりとお返しできたのか……。マングローブ再生への期待の大きさを強く感じた。



(快適で清潔な部屋。一日の疲れがよくとれた。感謝！)



(食事は、ヤシの葉で覆われたテラスで。風が気持ちいい。)



(豆の煮込みとサラダは定番メニュー。日本人の口に合う！)



(「マンダジ(揚げパン)」)。朝食に登場。中に煮豆を入れて。)

★村のスナップ



(子どもたちは、おもちゃがなくても元気いっぱい！)



(Gazilは漁村。釣れた魚は洗う。細長い魚。なんだろう？)



(マンダジを揚げています。台所では、薪を使用。)



(明日は結婚式。夜通し踊り明かします。「おめでとう！」)



(井戸で水くみ。洗濯もちろん手で。みんなよく働きます。)



(村には、カンガを巻いた女性が。マンダジを路上販売中。)



(美しい自然ばかりではない。漂流ゴミも・・・。)



(「Give me shoes」と言ってきた子ども。折り紙を贈った。)

5. 学んだこと・考えたこと

(1) 支えられて生きている

行きたくて応募した今回のプロジェクト。しかし、決定してからは、自問自答の日々だった。私が行くことで、本当に役に立てるのか？英語がしゃべれない私は、お荷物になるのではないかな？準備に焦る毎日。この経験を楽しもう！という心のゆとりなど一切なかった。多くの人の励ましの中で、気持ちを切り替え、いざ、出発。帰国してからは、「行ってよかった。」この言葉しか出てこない。ケニアでも、多くの人に支えられた11日間だった。

(2) “今の生活が当たり前ではない”

私は、“郷に入っては郷に従え”なので、日本のように快適で便利な物がない所でも、生活ができる。逆に、質素なその生活を美しいと感じる。

しかし、日本に帰ってきてみると、また便利な生活にすぐに慣れてしまう。そんなときに、ふと、ケニアでの生活を思い出す。“今、そこにあるもので心豊かに暮らす”。日本でもできるはず。日本の物の豊富さは異常なのかもしれない。自分の生活しか見ないと、世界が見えない。

“今の生活が当たり前ではない”。知ることは、変わろうとするきっかけになる。

(3) 本物に勝るものはない！

今回の本来の目的は、日本にはない自然に触れること。ケニアというと、サファリのイメージが強い。私も同じだった。海の景色が想像できなかった。実際に目にした、海・空・雲・緑・風・日差し……。言葉では言い表せない景色。「地球にこんな自然があったのだ……。」その景色の中に自分がある。母なるものに包まれているあたたかさ高さを感じた。その美しさがとても愛おしく思えた。守りたいと思った。

机上の勉強で環境問題を説かれても、なかなか身近に感じられない。“センス・オブ・ワンダー”の気持ちで、本当に美しいもの・危機迫るものに触れれば、自然と動き出せる。大きなことでなくてもいい。寝る前に、地球上に暮らす他の誰かのことを思うだけでもいい。それが、スタート。

(4) マンパワー

マングローブとの共存のために、村の人々が立ち上がっている。外から、再生を強要され、植林が進んだとする。しかし、そこから研究者が去った後、その森は……また、同じことの繰り返しになるだろう。

そこに暮らす人々が、必要性を感じて立ち上がらなければ、“共に存在していくこと(共存)”にはならない。これからも、この地で生きていくこと、何百年何千年先の子孫を思うこと、そこから生まれた行動力は、この先のマングローブ再生のカギを握っているにちがいない。

また、それを支える研究者やボランティアが世界各地から集まる。“たったひとつの地球”は誰のものでもない。みんなのもの。だからこそ、目の前で起きている現象にだけとらわれず、世界中に視野を向ける。できることからはじめよう。そんな思いが一つになって、村人の気持ちをサポートする。

人間だからできること。それは、“意識をもって集い、何かを動かすこと”。小さな力は、小さくない。かけがえのない宝だ。

こんな“たったひとつの宝もの”にも出会えた旅。これまた、多くの人々に感謝だ。

6. 学校教育へ

私は、教員として、この旅(プロジェクト)に出かけた。帰国した今、「いったい、自分に何ができるのだろうか？」と考えている。教員として何が。

地球環境の調査で出かけたわけなので、“自然”を切り口に考えることは基本になるであろう。

“環境教育”の究極の目的は何か。私は、“地球市民を育てること”だと考えている。小学生の段階で、難しい環境問題のメカニズムを理解することは難しい。また、省エネなどは、実際に効果的な解決への行動に移していくにも、保護者自身が意識を変え、家庭で取り組んでいくことが必要になってくる。(もちろん学校でできることには取り組むが。)

そう考えたときに、今求められているのは、即戦力となって行動に移していける市民だろう。大人に

なったときに急に環境について考えるのではなく、子どものときから、少しずつ考える機会をもつ。今の自分に何ができるのかは、まだよく分からないけれど、地球のためになにかしたい！そんな気持ちをあたためていくことが、遠回りのようではあるが、地球環境問題解決のための一番の近道なのではないかと思う。教育こそが地球を救う。

“地球のことを自分のこととして考える心”これは、強制からは生まれない。私は、その心をもち続けるために、子どもが本来もっている“センス・オブ・ワンダー（不思議に思う心）”の芽を、教師が逃さず見つけ、伸ばしていくことがスタートになると思っている。

美しいものに会い素直に感動する心、不思議な現象に出会って解明したいという好奇心、無残な現実に出会い悲しいと感じる心。この“出会い”は、自然に関係するものだけではないと私は考える。異文化・人々のくらし・戦争・災害・偉業など、なんでも“センス・オブ・ワンダー”の心をくすぐるきっかけになる。そして、地球のどこかの知らない誰かのことを想うようになる。そこに暮らす、同じ命をもった誰かの生活を知りたいと思う・守りたいと思う。そんな積み重ねが、いつか大人になったときの行動力につながる。地球環境問題を解決するための力に。きっと。

私は、教員として、この旅(プロジェクト)に出かけた。帰国した今、「私の仕事は、子どもたちの“センス・オブ・ワンダー”の心を育むことだ。」と改めて認識している。

この旅での“さまざまな出会い”を、子どもたちにも体験させたい。ケニアに子どもたちを連れて行くことができない以上、写真・映像・語りでの出会いになるが、きっと伝わる。どの子にも、感じ取るための“センス・オブ・ワンダー”があふれているのだから。

そして、今後、この旅(プロジェクト)に限らず、地球のどこかの知らない誰かのことを想う機会を見つけたら、どんどんと投げかけたい。それが、地球市民として教員としての私の使命だと思う。

ケニアで見つけた“たったひとつの宝もの”私の今後の人生の中で、輝き続ける。いつまでも。

7. 最後に

今回、私に、このような貴重な経験を与え支えてくださった、花王、アースウォッチ、学校関係者、友人、家族、そしてケニアで出会った多くの仲間感謝いたします。本当にありがとうございました。



Asante Sana !